高橋　真琴

『おやゆびひめ』のお話について

日本の『一寸法師』や、グリムの『親指小僧』など、小人の子どもが活躍する昔話は、世界に少なくありません。

ところが『おやゆびひめ』は、民話ではなく、アンデルセンが創作したお話といわれています。というのも、アンデルセン自身「これは私の独創的な童話で、スイレンの花を見ているうちに思いついた。」と書いているからです。しかし、これとそっくりな民話がデンマークにあるのです。お話がアンデルセンの頭の中に残っていたのでしょう。

とはいえ、さまざまな運命に翻弄されながらも、愛の心を失わなかったために、最後は幸福を得るという、いかにもアンデルセンらしいロマンチックな作品に仕上げています。

アンデルセン（一八〇五年～一八七五年）はデンマークの貧しい靴屋の息子として生まれましたが、苦労して詩人、作家になり、小説『即興詩人』によって名声を得ました。そのあと童話を書き始め『人魚姫』を含む第三童話集によって、童話作家としても認められるようになりました。

児童文学評論家　西本　鶏介

おひめさま　えほん 3

おやゆびひめ

原作／アンデルセン　高橋　真琴　文／武鹿　悦子

むかし、ひとりの　女の　人が、
「かわいい　あかちゃんを　さずけて。」
と、まほうつかいに　たのみました。
「まけば、なにか　はえるだろう。」
と　いって、まほうつかいは
むぎを　一つぶ　わたしました。
女の　人が　まいた　むぎから、
チューリップのような、きれいな
花が　さきました。
　そして、その　花の　中には、小さい
女の子が　すわって　いました。

'82-11
MACOTO

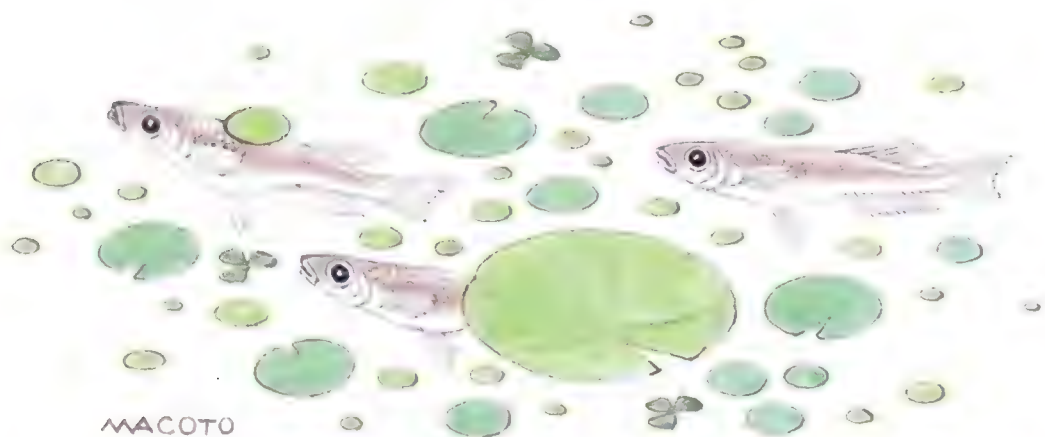
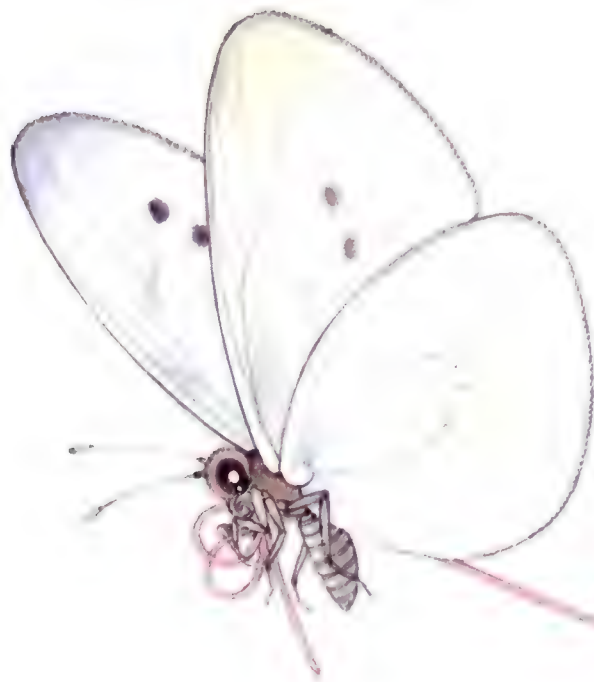
その　こは、おやゆび
ほどの　せたけだった
ので、『おやゆびひめ』と
よばれました。
よるは、ちいさい
くるみの　からの

ゆりかごで　ねむり、
ひるは、おかあさんが
みずを　いれて　くれた
おさらの　いけで、くさの
はの　ふねを　こいで
あそびました。

MACOTO '82

ある　ばん。
まどから　みにくい　すがたの
ひきがえるが　はいって　きました。
そして、あかい　ばらの
花びらに　くるまって　ねむって
いる、おやゆびひめを
みつけました。
「むすこの　よめが　みつかった。」
ひきがえるは、ゆりかごを
もちあげると、まどから　にわへ
とびおりました。

ひきがえるは、じくじくした
川ぎしの　いえへ、おやゆびひめを
つれて　いきました。
「コアックス、ケレレックス。」
みにくい　むすこは　いいました。
うれしい　ときも、それしか
ことばが　いえないのです。
おやゆびひめが　にげないように、
ひきがえるたちは　川の　中の
いちばん　大きい　すいれんの　はに、
ゆりかごを　のせました。

あさ　はやく、目を　さました
おやゆびひめは、なきました。
どこを　みても　水ばかりです。
どろぬまでは、ひきがえるたちが
けっこんしきの　したくを
いそいで　います。
「およめに　いくのは　いやよ。」
ないて　いると、川の　さかなが
よって　きて、すいれんの　くきを
かみきって　くれました。
「さあ　おにげ、はやく　はやく。」

MACOTO '82

はっぱが　くきを
はなれると、しろい
ちょうが　おりて　きて、
おやゆびひめの　ふくの
リボン(りぼん)を　ひいて
くれました。
はっぱは　ずんずん
ながれます。
ひきがえるは、もう
おいつけません。

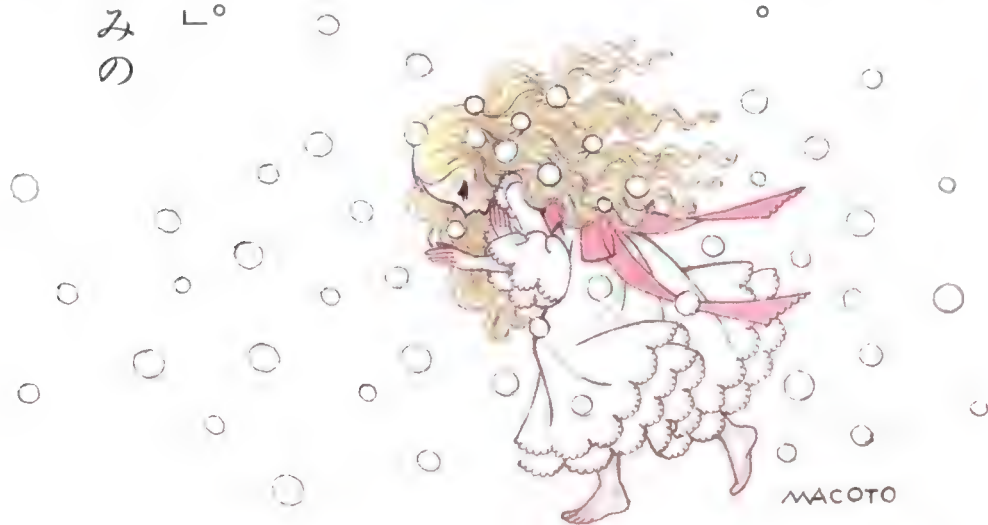
その　とき、こがねむしが　そらから　おりて
きて、おやゆびひめを　さらいました。
「なかまに　みせびらかして　やろう。」
こがねむしは、たかい　木の
上に、とんで　いきました。
「足が　二ほんしか　ないよ。」
「なぜ、しょっかくが　ないの。」
なかまが　あまり　わらうので、
こがねむしは、木の　えだの　上に
おやゆびひめを　おくと、どこかへ
いって　しまいました。

MAKOTO '82

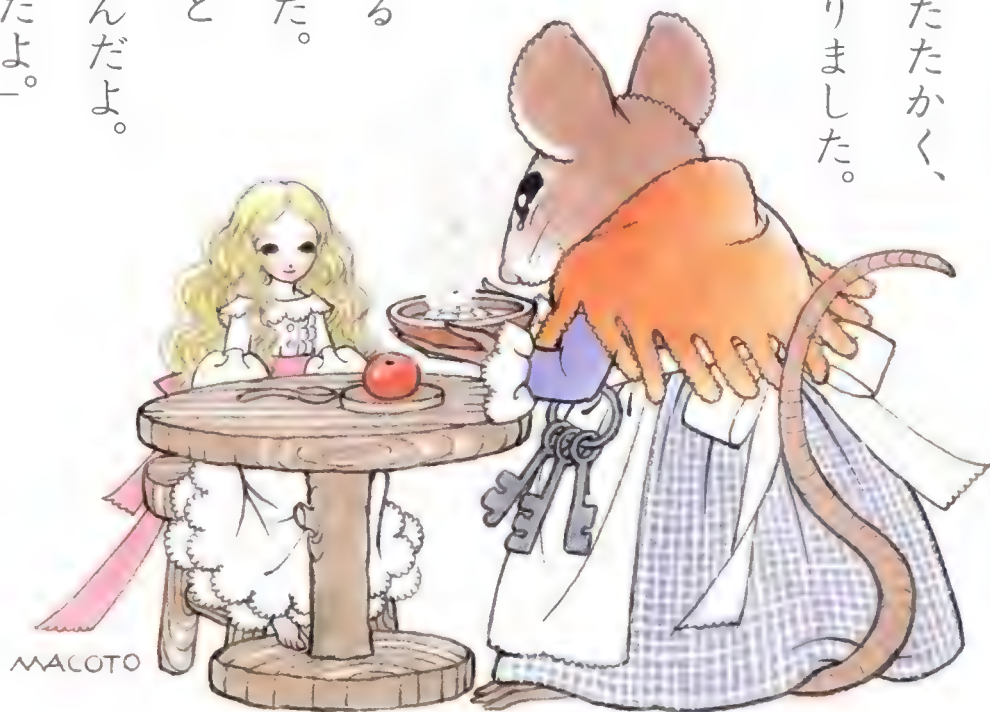
「こがねむしにも　きらわれるほど、
わたしは　みにくいのね。」
おやゆびひめは　かなしがって、
なつの　あいだじゅう、ひとりで
もりの　中に　いました。
あまい　花を　つんで　たべ、
つゆを　すくって　のみました。
ねむる　ときは、くさで　あんだ
ベッドを、はっぱの　下に
つるして、あめが　かからない
ように　したのです。

なつが　すぎ、あきが　おわると、
木も　花も　しおれ、はなしあいての
ことりたちも、どこかへ　いって
しまいました。
「おう　さむい。」
おやゆびひめは　ふるえました。
なんにちも　なに　一つ　たべて
いません。
ひゅうひゅうと　うなる　かぜに
まじって、ちらちらと　ゆきが
ふって　きました。

MACOTO '82

ひろい　むぎばたけへ　でても、
小(ちい)さな　おやゆびひめには、ふかい
もりを　あるくのと　おなじでした。
かりとった　あとの　むぎの
きりかぶが、そらへ　たかく
つきたって　います。その
きりかぶの　下(した)に、のねずみの
いえが　ありました。
「いれて　ください、のねずみさん。」
　ごとりと　とが　あいて、のねずみの
おばさんが　かおを　だしました。

MACOTO '82

のねずみの　いえは　あたたかく、
たべものも　たくさん　ありました。
のねずみの　おばさんは、
やさしくて　しんせつ
でした。

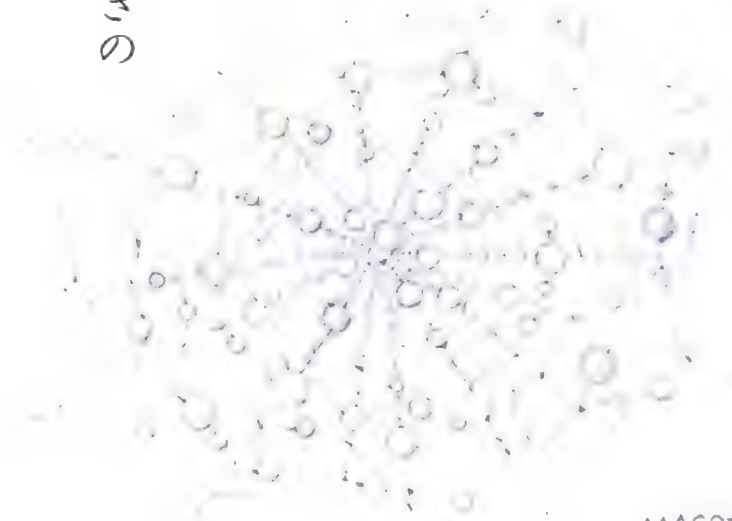
でも、　おかねもちの
もぐらが　おきゃくに　くる
日、　おばさんは　いいました。
「おやゆびちゃんや、　きっと
もぐらに　きに　いられるんだよ。
そして、　およめに　なるんだよ。」

MACOTO '82-11

おきゃくの　もぐらを　おくって　いく
みちに、つばめが　たおれて　いました。
しにそうで、うごけません。
おやゆびひめが　こわごわ
からだを　よせて　あたためると、
つばめは　いきを　ふきかえし、
みずを　のませると、やっと
目を　あけました。
「げんきに　なってね。」
おやゆびひめは、まいにち
かよって　かんびょうしました。

MACOTO

MACOTO '82

はるが　きて、お日(ひ)さまが　じめんの
下(した)まで　あたためるように　なりました。
げんきに　なった　つばめは、
「キービット、キービット。」
と　うたいながら、とおい　そらへ
とんで　いって　しまいました。
「わたしも　とんで　いきたいわ。」
おやゆびひめは　なきました。
「とんでもない。こんどの　あきには、
もぐらの　いえへ　およめいりだよ。」
のねずみの　おばさんは　いいました。

おやゆびひめは、なんども　にげようと
しました。でも、はたけの　むぎは、
そら　たかく　のびて　いて、
ふかい　もりの　ようでした。
おやゆびひめは　しかた
なく、およめいりの　ドレス(どれす)を
ぬわなければ　なりません。
その　ために　ねずみの
おばさんが　つれて　きた、四(よん)ひきの
くもが　はく　いとを、せっせと
つむがなければ　なりませんでした。

MACOTO

MACOTO '82

あきが　きて、いよいよ
あしたは　およめいりです。
もぐらの　いえへ　いったら、
もう　二どと　お日さまの
ひかりの　下へは
でられません。
おやゆびひめは、お日さまに
さいごの　さようならを　いいに、
そとへ　でました。すると、そらの
上で　だれかが　よびました。
「キービット、キービット。」

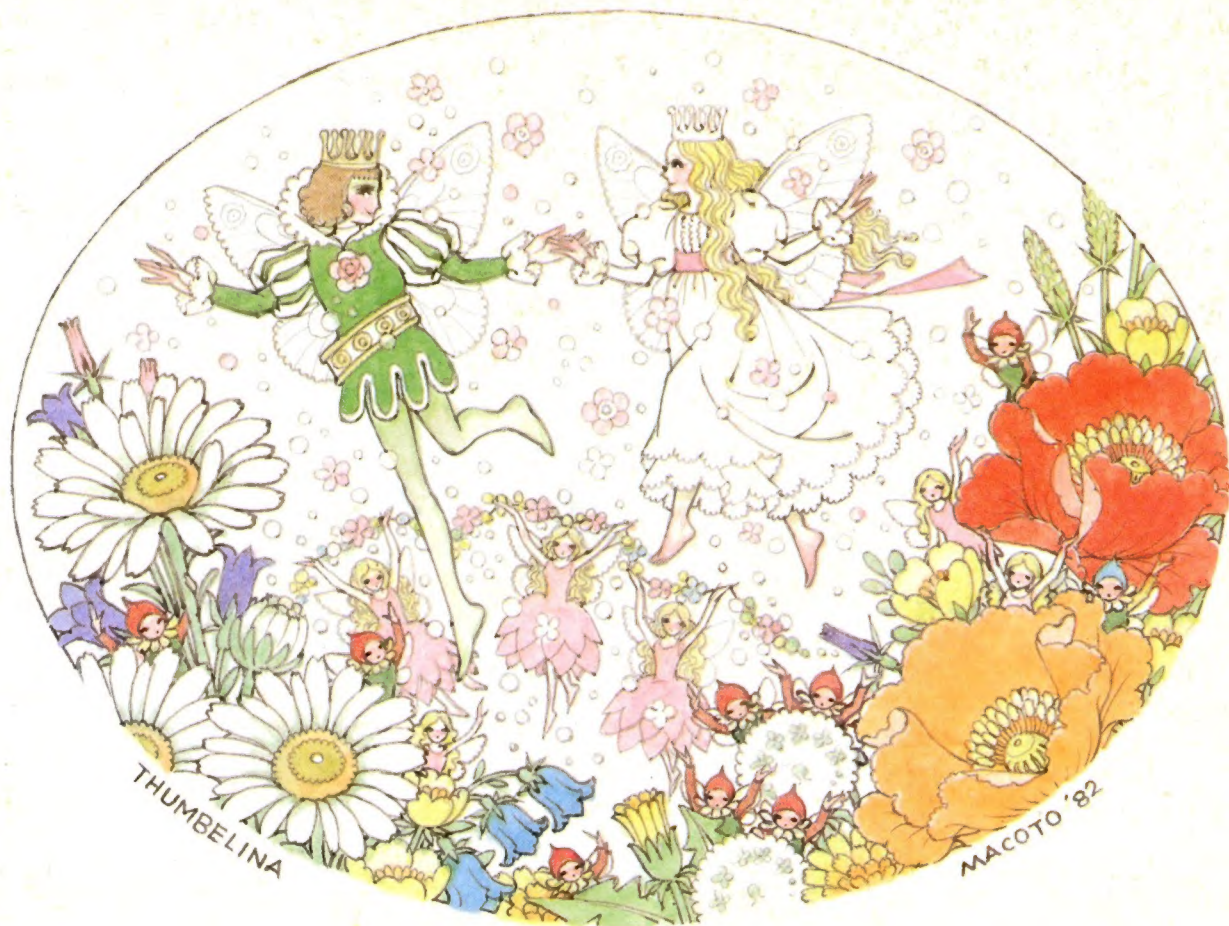
「やあ　かわいい　おじょうさん、
あの　ときは　ありがとう。」
たすけて　あげた　つばめです。
「ふゆが　すぐに　きますよ。
わたしと　いっしょに
いきませんか、どこよりも
うつくしく　おひさまが
かがやく　くにへ。」
「ええ　いくわ。つれてって。」
おやゆびひめは、つばめの
せなかに　のりました。

つばめは　たかく　とびました。
もりを　こえ、うみを　こえ、
レモンや　オレンジが　いっぱいの
みなみの　くにへ　はいりました。
おやゆびひめは、ふかふかした
はねの　中から　からだを
のりだして、あおい　みずうみや
まちの　けしきに　みとれて
いました。

「さあ、つきましたよ。」
つばめが　いいました。
お日さまは、大きく
かがやき、ひろい　花ばたけに
いろとりどりの　ちょうが
とびまわって　いました。
おやゆびひめが　あかい
花の　中に　おりると、
すきとおった　はねを
せなかに　つけた、きれいな
王子が　たって　いました。

MACOTO '82

「あなたを
まって　いました。」
そう　いって、王子は
きんの　かんむりを　おやゆび
ひめの　あたまに　のせました。
「花の　くにの　女王さま。」
くにじゅうの　花の　てんし
たちが、ふたりの　けっこんを
いわいました。つばめも
さびしく　うたったのです。
「キービット、さようなら。」

MACOTO '82

王子は　すきとおる
はねを、おやゆびひめに
おくりました。
そして　ふたりは、
花から　花へ
ひかりかがやいて
とびまわりました。
花の　くには
いつも　はるなのです。

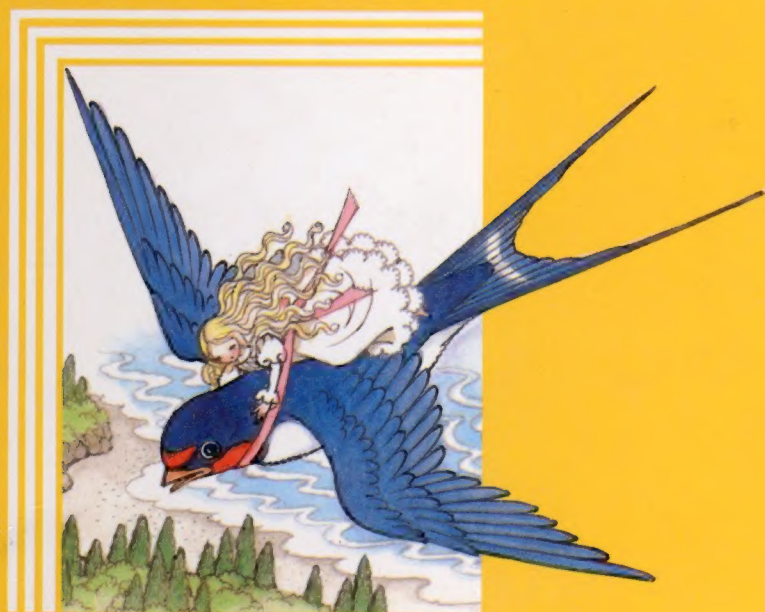
（おわり）

おひめさまえほん 3　　**おやゆびひめ**

作・絵／高橋　真琴
原作／アンデルセン
文／武鹿　悦子

定価 **300** 円

編集兼発行者／相賀徹夫
発　行　所／株式会社 小学館
〒101 東京都千代田区一ツ橋2－3－1
印　刷　所／凸版印刷株式会社

昭和57年 4 月20日／第 1 刷発行

発行・小学館　雑誌コード 61009-03　Printed in Japan　927003　定価**300**円